

益田市内石造物調査概報 6

—医光寺の石造物—



令和 8（2026）年 3 月

益田市教育委員会

例 言

- 本書は、市内の石造物調査事業の一環として実施した、益田市染羽町に所在する医光寺の石造物調査の報告書である。
- 本書に係る調査の経過は以下のとおりである。
平成 27 年度 石材の鑑定 令和 7 年度 石造物の調査、拓本、実測
- 調査は次の体制で実施した。
事務局 平成 27 年度：木原 光（文化財課課長）、桐木恵子（文化財課長補佐）、山本浩之（同主幹）、中司健一（同歴史文化研究センター主任）
令和 7 年度：田中一史（文化振興課課長）、長澤和幸（文化振興課課長補佐）、松本美樹（同主幹）、中司健一（同歴史文化研究センター主査）
調査指導者 西尾克己（元島根県古代文化センター長）
中村唯史（島根県立三瓶自然館サヒメル企画情報課調整監）
調査員 中司健一、原浩平（文化振興課主任）、大本哲平（文化振興課主事）
- 実測図・写真・拓本は益田市教育委員会文化振興課で保管している。
- 調査を許可いただいた医光寺、ご指導いただいた西尾克己氏、中村唯史氏にお礼申し上げる。
- 石材鑑定については、中村氏からご教示いただいた。
- 石造物の実測・拓本は西尾氏の指導により中司・原・大本が、本書の執筆・編集は中司が行った。実測図のトレースには三浦竜之介氏の協力を得た。
- 表紙の写真は医光寺の近世宝篋印塔である。
- 現地調査にあたっては、可能な範囲で写真撮影と実測、石材の鑑定を行った。
- 石造物の記号番号として、医光寺のものは I K とした。

第1章 調査の目的

益田市内には、大型の花崗岩製五輪塔（兵庫県神戸市の六甲山の御影石の可能性もある）、福井県西部の日引石（安山岩質凝灰岩）製の宝篋印塔や像容板碑、島根県大田市の福光石（凝灰岩）製の宝篋印塔、島根県鹿足郡津和野町の青野山系安山岩製の宝篋印塔など、作られた年代、石材、産地、形態、大きさがそれぞれ異なる、多種多様な中世石造物が多くこのされている。

これらは、中世の益田が、瀬戸内海を通じて兵庫への、あるいは日本海を通じて小浜への（兵庫も小浜も京都に運ばれる物資が集積される港町）、石見銀山の玄関港である温泉津への航路や高津川を利用し、物資の輸送をしていた可能性を示唆する。なぜなら、これらの石造物は供養塔（亡くなった人を弔うための石塔）としての利用を前提としつつも、交易船のバラスト（軽くなった船を安定させるための重し）の役割も担っていたと考えられるからである。

また、大きな石造物は荘園領主や武士たち中世前期の有力者の存在を、小さな石造物は中世後期に比較的裕福な民衆らも供養塔を建てるようになったことを物語る。

石造物については、その石材や形態から産地や年代を調べる取り組みが広く行われているが、「形態は日引石製の宝篋印塔によく似ているが、石材は日引石ではない」、などの事例もあることから、ただちに産地や年代を特定するのではなく、石材の鑑定と図化を進め、事例の蓄積を図る必要がある。その点、多種多様な石造物が見られる益田市は非常に多くの事例を提供できると考えられ、継続的に調査を実施し、その成果を『益田市内石造物調査概報』として発表している。

第2章 医光寺の石造物

第1節 所在地の概要

医光寺の西隣には中世の時代に崇観寺があり、崇観寺が医光寺の事実上の前身寺院である。

崇観寺は貞治2年(1363)、斎藤長者の妻直山妙超大姉の発願により、龍門土源を開山として開かれたと伝わる。龍門土源のものとされる木像が医光寺の開山堂に安置されている。

応安4年(1371)には益田兼見を大檀那として崇観寺の本尊「木造釈迦如来坐像」(益田市指定文化財)が作成されており(『中世益田・益田氏関係史料集』282号。以下では『史料集』282号のように略す)、以後、益田氏の庇護を受けたと思われる。この時の住持(住職)は威山(または成山)長雄で、長雄が崇観寺住持となったことを祝う友山士偲、岐陽方秀の文章が彼らの作品集(「友山録」、「不二遺稿」<『史料集』278・279号)に見える。

同様に、九成口韶が汝霖妙佐から(「汝霖佐禅師疏」<『史料集』319号)、翬梁口雲が岐陽方秀から(「不二遺稿」<『史料集』353号)、崇観寺住持就任を祝われている(九成、翬梁とも3字目は不明)。

康暦2年(1380)、崇観寺は安国寺(浜田市上府町)とともに諸山(鎌倉・室町幕府が設けた禅宗寺院の格で、五山・十刹に次ぐ)になったという(「甲利記」<『史料集』298号)。

永徳3年(1383)の祥兼(益田兼見)置文(『益田家文書』853号)では、崇観寺は兼見が諸山にしたこと、益田家が特に大切にすべき寺院であること、住持は本寺東福寺の莊嚴藏院と相談して決め、幕府の御教書(将軍が発給する文書)を与えられた者が務めるべきことなどが定められた。医光寺も領内の小庵の一つとして見える。

応永24年(1417)、崇観寺の寺領10町半に対する段銭が、益田氏の嘆願により、石見守護山名氏から免除された(『益田家文書』92号)。

益田氏の一族で、長府長福寺(山口県下関市)などを経て東福寺住持を務めた勝剛長柔が康正2年(1456)に崇観寺で亡くなったという(「春暉庵起龍永春和尚行状」<『史料集』425号)。山名氏の石見守護代であった義宗という人物が「安富庶子坂本分」を崇観寺が知行していることを承認し勝剛の計らいに任せるよう、守護山名氏に求めており、勝剛が崇観寺の住持を務めた時期があるようだ(『益田家文書』90・91号)。山名清宗が崇観寺に連絡をとったこともあり(『益田家文書』959号)、山名氏とも良好な関係が築かれていた。

崇観寺は諸山となったため、その住持の任命権は室町幕府が握っていた。このため、室町幕府の住持任命について多くの情報を載せる「蔭涼軒日録」、「蔗軒日録」といった記録に、崇観寺の住持の名前が見える。列举すると、永享10年(1438)の元信、長祿3年(1459)の長悦、寛正4年(1463)の禅虎、文正元年(1466)の応俊、文明16年(1484)の玉岫長璆、同17年(1485)の昌佐、円徳2年(1490)の景允である(『史料集』373・404・410・418・447・454・496号)。また、益田出身で、東光寺住持竹心周鼎の弟子月岑長玉(1585年没)も住持であったという(『史料集』822号)。

彼らの内、玉岫長璆は、崇観寺住持を固辞し、結局は着任したものの、1年間で昌佐に代わった。それは、1485年7月が崇観寺開山龍門土源の百年忌にあたり、石見の諸檀那が東福寺莊嚴藏院に土源の門派である昌佐を住持とすることを要請していたためと思われる。この要請は聞き入れられ、昌佐が住持となった。諸檀那という文言からは、益田氏をはじめ石見の多くの人々が崇観寺に帰依していたと思われる(『史料集』446・447・454・460号)。

通説では、崇観寺は天文年間(1532～55)に戦乱により衰亡し、益田宗兼が隣接する医光寺を後身寺院として再興したという。しかし、益田藤兼が足利義昭(1568年から将軍)のもとに宗観寺僧

(崇観寺のことと思われる)を派遣するなど(『益田家文書』740・754号)、崇観寺の存在は16世紀後半までうかがわれる。先述の崇観寺の釈迦如来坐像が医光寺に伝わることから、医光寺が崇観寺の後身であることは動かないが、崇観寺の終焉については検討の余地がある。

その後の医光寺の歴史は、医光寺の古文書があまり明らかになっていないため、「医光寺記録」などによったとされる矢富熊一郎著『石見瀧蔵山医光寺史』に今のところはよるしかないが、特に江戸時代については細かい年代までは判明していないことが多い。

第2節 医光寺の石造物の概要

【表1】 医光寺境内の主な石造物一覧表

記号 番号	形態1	形態2	石材	高さ (cm)	最大幅 (cm)	備考
I K 1	五輪塔(残闕)	空風輪	花崗岩	26.0	18.0	
I K 2	五輪塔(残闕)	空風輪	花崗岩	15.4	18.8	
I K 3	五輪塔(残闕)	火輪	花崗岩	29.0	40.0	
I K 4	五輪塔(残闕)	空風輪	安山岩	26.5	18.0	
I K 5	五輪塔(残闕)	火輪	安山岩(日引石カ)	10.5	23.6	
I K 6	宝篋印塔残闕	相輪	安山岩(日引石カ)	21.5	10.8	
I K 7	宝篋印塔残闕	相輪	安山岩(日引石カ)	25.5	12.8	
I K 8	宝篋印塔残闕	笠	安山岩(日引石ではない)。 長石の粒が多いのが特徴。 益田では他に見ないタイ	20.0	13.8	
I K 9	宝篋印塔残闕	笠	同上	19.8	26.5	
I K 10	宝篋印塔残闕	笠	砂岩	18.8	26.0	
I K 11	宝篋印塔残闕	基礎	安山岩(日引石カ)	16.8	20.5	
I K 12	板碑	地蔵が 2体	安山岩(デイサイトに近い。日引石ではない)。益 田では他に見ないタイプ。	32.0	20.0	
I K 13	宝篋印塔		花崗岩	124.2	275.0	近世宝篋印塔
I K 14	石碑	自然石	—	105.0	60.0	米原晩山句碑
I K 15	石碑	自然石	—	85.0	55.0	蘭阿坊句碑
I K 16	石碑	自然石	—	113.0	57.0	三聖塚
I K 17	石碑	自然石	—	150.0	70.0	蛸阿坊句碑
I K 18	石碑		—	63.0	67.0	可雲坊句碑。「松風のし くれや空に笑ふ星」
I K 19	石碑		—	230.0	300.0	大谷嘉助歌碑。 昭和41年建立。
I K 20	石碑	自然石	—	185.0	160.0	山路忠恭先生之碑。 昭和11年建立。
I K 21	石碑	自然石	—	75.0	44.0	伝雪舟灰塚。
I K 22	墓石	自然石	—	100.0	45.0	梅林智春(益田宗兼室)墓
I K 23	石碑		—	230.0	75.0	益田宗兼墓。 明治27年建立。
I K 24	石標柱		—	161.0	24.5	史蹟及名勝医光寺庭園。 昭和6年8月建設。
I K 25	石標柱		—	173.0	34.3	瀧蔵山慈善院観音堂への 標柱。明治41年建立。
I K 26	手水鉢		—	58.0	88.0	日露戦争に関する記念。
I K 27	墓石	自然石	—	75.0	37.0	香積院一庵宗粒居士(俗 名一兵衛)墓。 天明5年再建。
I K 28	石臼		—	—	37.0	I K 26の一兵衛の伝承に 関する石臼という。

以上の表のように、医光寺境内には多種多様な石造物が所在するが、本報告書では中世のものと思われる石造物と近世の宝篋印塔、主な句碑を紹介する。実測図・拓本はすべて1/10である。

I K 1 五輪塔の空風輪。空輪は球形を呈す。風輪の上部に水垂勾配がある。それぞれ一面に梵字を彫るが、彫りは甘い（ケンとカンカ）。

I K 2 五輪塔の空風輪。風輪の上部に水垂勾配がある。石灯籠の部材として使われ、セメントで固定されている。

I K 3 五輪塔の火輪。軒端はわずかに外に開き、上辺・下辺ともに反るが、上辺の反りが大きい。梵字を四面に彫るが、面の左下方向に極端に寄るのが特徴的である。萬福寺3号塔に大きさや梵字の位置が似る（間野 1999）。後に石灯籠の部材として使われ、セメントで固定されている。

I K 4 五輪塔の空風輪。それぞれ一面に梵字を彫るが、彫りは甘い（キャーとカーカ）。風輪の上部に水垂勾配がある。

I K 5 五輪塔の火輪。軒端はわずかに外に開き、上辺のみ反る。高さがなく、扁平な印象を受ける。上部のホゾ穴はセメントで埋められている。

I K 6 宝篋印塔の相輪。九輪のうち四輪と請花部とホゾが残る。九輪の太さは同じ比率でわずかに逓減する。溝は線状に表現される。請花の装飾はない。ノミ痕は見られない。

I K 7 宝篋印塔の相輪。宝珠の一部カと請花、九輪のうち五輪が残る。九輪の幅は同じ比率で逓減する。溝は線状に表現される。請花はわずかに装飾されている。

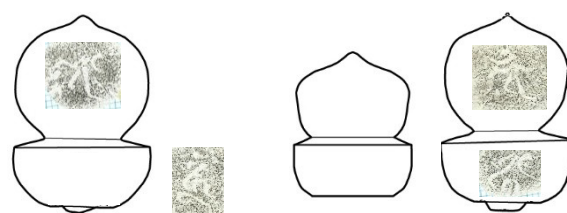
I K 8 宝篋印塔の笠。隅飾はわずかに外に傾く。二孤式で輪郭は巻かない。段丘は上5段、下2段。上の段級の水垂勾配は下のものほど傾斜がつく。上部のホゾ穴はセメントで埋められている。

I K 9 宝篋印塔の笠。隅飾は大きく外に傾く。二孤式で輪郭を巻く。段丘は上6段、下2段、いずれも最上段・最下段が他の段より高い。上部のホゾ穴はセメントで埋められている。

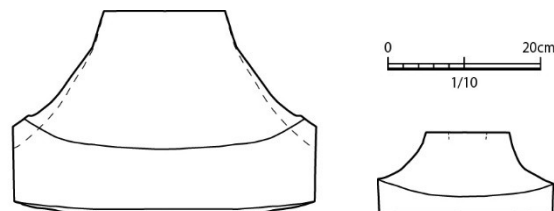
I K 10 宝篋印塔の笠。隅飾は外に大きく傾く。二孤式で輪郭を巻く。現状では隅飾と軒が一体に見えるが、摩耗のための可能性がある。段丘は上5段、下2段。底部は粗く削られ、ホゾ穴は確認できない。

I K 11 宝篋印塔の基礎。小ぶりながらよく整った形をしている。格狭間は1面のみ彫られ、蓮弁も彫る。底面の仕上げは粗い。石材からも日引石製である可能性が高い。

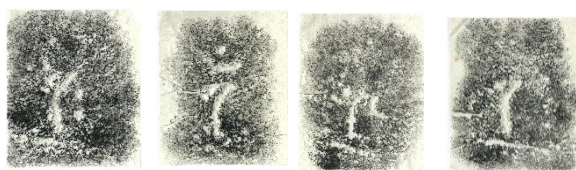
I K 12 板碑。上部は三角形に加工されている。現状は全体に丸みを帯びており、下部が折られるなどした可能性もあるものの、下方向への長さがない。背面や下端部のノミ跡は粗い。



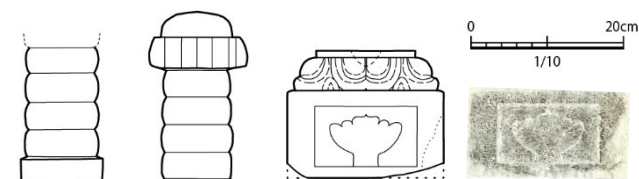
I K 1 風輪の梵字拓本。 I K 2 I K 4



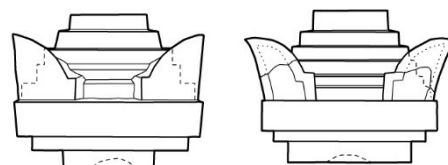
I K 3 I K 5



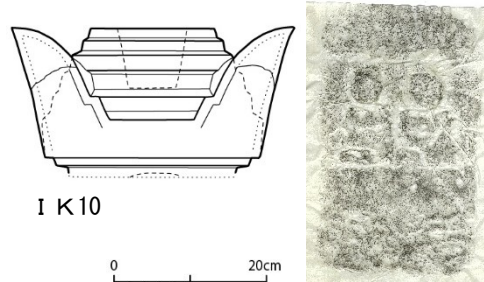
I K 3 梵字拓本 左から東、南、西、北。



I K 11 格狭間拓本



I K 8 I K 9



I K 12 拓本

図1 実測図

I K13 江戸時代の宝篋印塔。

中門の内側、西隣に、本堂側(北北東方向。以下では単に北とする)を正面に建つ。

石積基壇の上に建つが(表紙写真参照)、実測図では省略している。四段の石段の上に、一つ目の基礎(基礎部(下)とする)、蓮華座状の段、その上に通常の宝篋印塔に相当する部材が乗る。

相輪部は九輪のうち七輪までを残し、宝珠は失われている。九輪は溝が丁寧に彫られている。実測図は写真をもとに推測したもの。

笠部は、隅飾は北東方向のみ残る。一弧式で、輪郭を巻き、その中に渦を巻く。段丘は上3段、下2段。

塔身部は、四面に、外から、杵、月輪、梵字を彫る。

基礎部は、正面のみ杵を彫り、「普」字が彫られる。東側に「有栖川一品／職仁親王家臣」(／は改行。以下同)と彫る。南側・西側には文字は彫られていない。

基礎部(下)の東側に「南嶺代」、西側に「施主／仁保寿山法橋」と彫る。

石材は花崗岩。河口は丁寧にノミ痕は消されている。

建立年代は彫られていないが、基礎部東側に「有栖川一品職仁親王家臣」とあり、職仁(よりひと)親王が一品に叙された寛延2年(1749)から、死去した明和6年(1769)までの



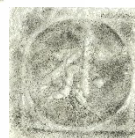
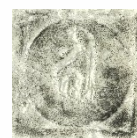
笠部の隅飾
(北東方向、
東側)の拓本



基礎部(東側)
の拓本。



基礎部
(下)(東
側)の拓
本。



塔身部の拓本。
右から時計回
りに、東、南、
西、北。



基礎部
(下)(西
側)の拓
本。



間に建立されたものと推定できる。また、基礎部(下)に「南嶺代」とあるが、南嶺が医光寺住職を務めていたのは18世紀後半であるため、矛盾しない。

有栖川宮家と医光寺の関係や施主とされる仁保寿山法橋については、現時点では不明である。



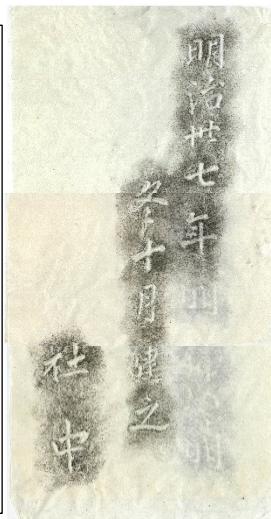
医光寺境内の句碑（左から I K14、I K15、I K16、I K17）

I K14

晩山の句碑。
晩山は米原
祥恭の号で、
別に恭庵とも
号した。
恭庵は嘉永
2年(1849)9
月に高角村(益
田市高津町)で
種痘を実施し
た人物である

(染羽天石勝神社に自ら建立したという「種痘記念
碑」がある)。

明治卅七年
冬十月建之
社中



I K14 裏面拓本

雪汁て
飯焚さとや
梅の花
七十八翁
晩山



I K14 表面拓本

一重つちりて
静けし夕桜



I K15 拓本

I K15 蘭阿坊の句碑。

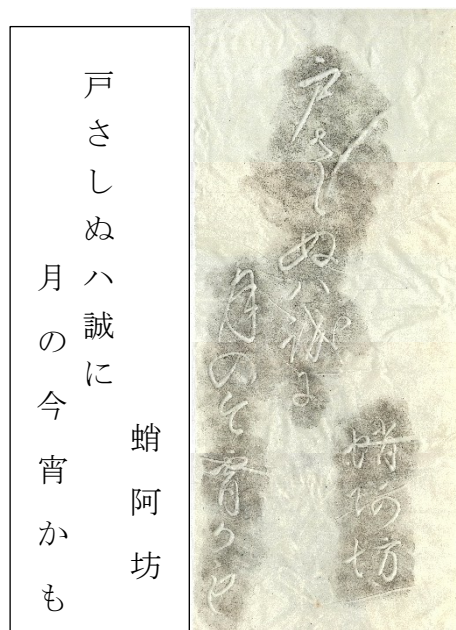
矢富熊一郎著『石見瀧蔵山医光寺史』によると、蘭阿坊は医光寺22世住職武山祖文の俳号で、寛政4年(1792)生、庵号「百華窟」、益田の俳壇の月下吟社を興隆し、三条井社(I K16 参照)と拮抗させたという。

I K16 三聖塚と称される。

表は、中に松尾芭蕉、右に丈草(内藤本常。蕉門十哲)、左に東華坊(各務支孝<かがみ・しこう>。蕉門十哲)の句を彫る。

蛸阿坊(I K17 参照)が建立したという。蛸阿坊を中心とする三条井社はこの3者の流れをくむことに由来するという。

裏面にも3句あるが、判読困難。



I K17 拓本

【主要参考文献】矢富熊一郎『益田町史(下巻)』益田公民館、1952年。矢富熊一郎『石見瀧蔵山医光寺史』島根郷土誌矢富会、1964年。矢富厳夫『益田の石碑文』石見詩人社、1975年。間野大丞「益田平野の中世石造物」(田中義昭先生退官記念事業会編集・発行『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』1999年)。東京大学史料編纂所『大日本古文書 家わけ第二十二 益田家文書之一〜五』東京大学出版会、2000年、2003年、2006年、2012年、2021年。益田市教育委員会編『中世益田・益田氏関係史料集』益田市・益田市教育委員会、2016年。益田市教育委員会編『中世益田ものがたり』益田市・益田市教育委員会、2017年。

益田市内石造物調査概報 6

一 医光寺の石造物一

発行・印刷 令和8年3月31日

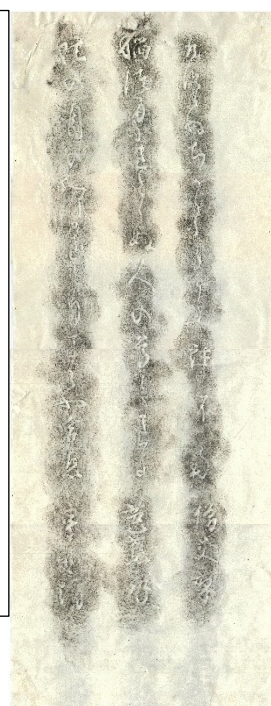
編集・発行 益田市教育委員会

印刷 株式会社タイピック

(島根県益田市常盤町7番3号)

取つかぬちからにうかふ蛙かな
稲つまにさとらぬ 人の尊さよ
蛇の目の何かさととりてはや合点

芭蕉翁
東華坊



I K16 表面拓本



I K16 裏面拓本

I K17 蛸阿坊の句碑。

蛸阿坊は、矢富熊一郎著『益田町史(下巻)』によると、益田村宿老右田家6代の三右衛門、長じて代治郎のことで、庵号「夏慮窟」、俳号「蛸阿坊梨般」、「多々良古端」などと号した。三条井社を設立し、益田の俳壇の基礎を築いたとされる人物という。

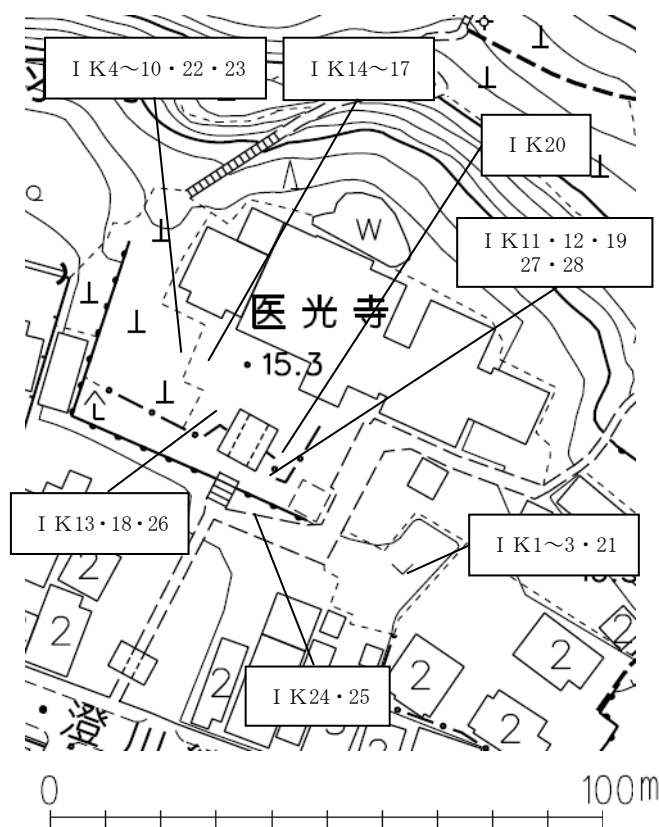


図3 石造物の位置図(「益田市都市計画図」に加筆)